

# 『長流』 昨今

## 内野潤子

(歌人・エッセイスト)



ゆれたることし蓮の白花 『同』  
味わい深い佳作である。昭和四十三年と四十四年には、宮中歌会始の選者を務めたこともあった。

銀作は若山喜志子の妹で、やはり歌人の潮みどり(うしおみどり)と大正八年に結婚したが、潮みどりは大正十二年頃から体調を崩して、昭和二年に亡くなられた。

そしてみどりの友人の長谷川ゆりえと結婚された。ゆりえは山形県西置賜郡に生まれ、大正十年二十歳の時に上京して、神田区駿河台の金杉病院に務め続いて十二年永田町の黒須病院に勤めていたが、昭和三年二十七歳で銀作と結婚した。病院の事務の仕事は当時としては珍しく、ゆりえは自立した女性であった。『創作』には大正十一年に入社して歌を作っていた人でもあった。

長谷川ゆりえの第一歌集『素顔』は昭和三十二年に上梓されたもので、戦後の日常生活が手にとるように写された一冊である。

作者はこの本のあとがきに次のよう

と言わせないような歌の境地を目指した人である。

一本ほど枯穂のままに立ち残る芒を切りて枯れしものなし 『木原』

枯原の夜露のなかに影太く

立つ裸木にあゆみ近づく 『同』

泣きながら通りゆく子を見むとして

机の上の眼鏡をさがす 『寸土』

わがこころなににさわくと佇めば

私の所属している短歌の結社『長流』は若山牧水系で、牧水の義弟に当たる長谷川銀作を中心に数人の者が集まって発刊されている。ロシア文学の稲田定雄・鹿児島島の歌人石田耕三・長崎の出身白石昂らが居て牧水の『創作』からの流れを受けているが、長谷川銀作は牧水がそうですか歌と呼んだ内容の薄い報告だけの歌をそうですか

に述べている。前略「結婚後東中野の高根町に住み私なりにゆきたいところへゆき、見たいものを見、食ひたいものをくい、読みたいものを読み、一人の子を育てながら、羽をのばしてをりました。それが戦後は、廻り舞台のかけにばかりいなければならなくなり、羽をひろげるところか、愉しかった昔ばなしさへ出来ないようになり、好きな煙草もやめてしまいました。住居も転々と変り、ただ生きていると言ふだけになりました。不思議に歌だけはやめずに作って来ました。これからも作るつもりでをります」と結んでいる。昭和二十一年の歌は戦後の空気を一ぱいにはらんでいて、今も色あせず迫ってくる。

夢に見し紫ばめる 餡の色  
覚めての後もわれはたのしむ  
昼過ぎよりきほひ出でゆくわが夫に  
国民酒場休むことなかれ  
戦の火に焼けていたくゆがみたる  
盥たらいを使ひ一年過ぎぬ  
一首目は甘い物の好きな作者の思い

が出て和菓子などどこにもなかった當時をふり返らせる。二首目は夫の銀作がお酒が好きで、わずかに時間で飲める国民酒場があった頃の内容で、国民酒場にはきほつて出てゆく夫を見送る妻のまなざしである。三首目は、何もかも戦火に焼けてしまった者の心で、新しいたらいは売っていないから、それを使うより外なかつたのである。

欲しきものラチオ摺鉢糖味噌と  
思ひつづくる眠りつく前  
配給所に塩はまだ来ず枯原の  
野火あと黒きほとりをかへる  
夫と子の眠りで全くしづかなり  
たのしみながら帯封を書く  
一首目の切実な主婦の願い。塩も配給だったあの時代。三首目は当時、牧水の結社誌『創作』は銀作が編集していて、出来上がって本を送るのはゆりえが帯封を手書きで全員に送っていたのである。それをたのしみながらと詠む作者の人柄が浮かぶ歌である。  
吹き降りの今日はたび傘さして  
諸もろを洗ひ水を汲み食器を洗ふ

午前四時電気コンロの利くうちに  
けふ一回のパンを焼く  
明日あたり配給されむさつま諸  
歩道に積まれ雨止まず降る

台処をあずかる者はまず家族に食べさせなければならぬ。アパートの暮らした外の厨を使う外ない。傘をさして食事の用意をする。電気コンロの電気もみんなが使うと火力が弱くなるので、朝暗いうちから配給のメリケン粉のパンを焼くという現代では想像を絶する主婦の姿である。作者ゆりえはその後第二歌集『木綿』上梓昭和六十一年八十五歳で逝去された。現在の『長流』は、たくさんのお仲間が亡くなり、石田耕三夫人照子を中心に古い会員が八名編集委員となり月々刊行されている。日常詠が多いが作品のレベルは決して低くはなく、NHKの大会でも魚谷委員が一位となり、他のイベントでも常に何人かが賞をとれる力をもっている。十月二十六日二十七日東京のガーデンパレスで大会を開いた。

# ミシガンの秋



宮地 智子  
(詩人)

地図の上から言うと、ミシガン州は、北米大陸の東寄りに位置するのだが、アメリカでは普通、この辺りをアメリカ中西部と呼んでいる。

医学の勉強のためにアメリカで学んでいる娘夫婦とその娘達が、この中西部のミシガン州、イーストランシングにきて五年になる。

ミシガン湖と、ヒューロン湖に挟まれたこの地は、至る所に大小の湖、沼が点在する湿地帯である。その昔、明治二十二年頃南方熊楠が学んだラランシング農学校（現在はミシガン州立

大学）は、中途退学ということになるが、その後、今のミシガン大学（ミシガン州立大学とは別である）のある、アナーバーの原野に住み、苦学しつつ、日本では目にしたこともない珍奇な動植物を採集し、整理研究した、そのような土地柄である。（津本陽著「巨人伝」より）

娘一家の住むイーストランシングもまた、百年前はそのような土地であったことは容易に想像ができる。今では芝生の庭のついた二戸建の家が並ぶ住宅街として静かなたたずまいを見せて

いる。

二人の孫娘の長い夏休みが終わりに近づいた頃、私は日本から、このミシガンへ、やって来たのである。住み込みで日本から来ていたオーペアさんが突然辞めたので、次の人が来るまでの間、どうしても私に来てほしいとの娘からのたつての願ひである。

デトロイト空港から、出迎えの娘の運転する車で一時間程で到着した。

秋の気配が漂い始めたかと思うと翌日は夏の暑さがぶり返すといった日々が過ぎ、夏休みの始めに蒔いた種がその頃になってやっと咲き始めた。これは毎週土曜日に開いている日本人補習校の夏休みの宿題の観察日記のための教材である。

アメリカの学校ではほぼ三か月に渡る夏休みの宿題は全くないのである。けれど九月六日、上の子は四年生に、下の子が二年生に進級すると、次の日からは毎日宿題が出る。単語のスペリング、算数の計算など。アルファベットや数学には抵抗感ないらしく、学校

から帰るとすぐに宿題を片づける。けれど問題は日本語である。

漢字、かな、かたかなの三種の表記法を使う日本語の勉強を嫌うのである。殊に漢字の組習は辛いらしく、何かと理由をつけては逃げ回る。そのうち、「私はアメリカ人だ。」と言い出す始末。(もち論日本語で) 日本人学校は嫌い、アメリカの学校の方が楽しい、とも言う。私の作るお弁当には注文をつける。ピーナツバターを塗って二つ折りにしたパンと、果物か、時に肉や野菜を入れてもよいと。おにぎりを持って行くと皆に「これなに、これなに。」と、好奇の目をして聞かれるのが嫌なのだ。子供は子供なりの社会性を身につけているのだ。ご飯のお弁当は、日本人学校に行く時だけにする。

漢字の宿題をしている時にはしばしば投げ出し、泣きわめくことがある。それは、二人同時ということはなく、不思議とひとりずつ別々だ。

そんな明け暮れのうちに秋も深まり、沼のほとりに建つこの家の回りの

景色にも赤や黄の色が目立ち始め、首の長いカナダ雁の群れが、ガアガアと鳴き交しながら、夕焼の空のなたへと飛んで行く日々のある日、勉強の手を休め、「さあ、みんなで夕焼けを見に行こう。」と誘い出した。広いペランダに出ると二人とも大はしゃぎで踊り出す。意味不明の歌をうたい出す。(オッホー・ウ・ハッハー・ティンティン・ワラワラピンピン)。リズムカルで、浮き浮きするようなメロディーにこちらも一緒になつて彼女らのまねをする。芝生に出て三人でフリスビーをする。そのうち、オレンジ色の可憐な花が群れ咲いているのを見つめる。長野県の高原では、赤紫や黄色のつりふね草がこちらではこんな色。実は指で触れると勢いよく弾ける。ひとしきり遊んで夕空の茜色が消え夕闇が空を蔽う頃また家の中に戻って夕食。さて、残った宿題はどうするか。私は思案中に暮れるのである。

さあ、元気を出して呪文をかけてみる。(おちゃのこさいさいへのかっ

ば)。何とか効果あり、そして彼女らは新しい日本語を覚えたのである。こちらにもまた意味不明の。

翌朝、二人が学校に出た後、私は疲れの残った体を休めに二階のベッドに横たわる。窓のブラインドを上げて、ガラス越しに外を見ると、目の前にヒッコリーの大木の枝が大きく横に広がっていて、何やら小動物が枝から枝へと走り回っている。りすと、ひと回り小さいチップマンク(シマリス)である。木の実の殻を弾いては忙しそうに齧ってはまた別の枝へと駆け回る。人間どもが出払った後の住宅街に、わらわらと出現して走り回る彼らの愛らしい姿に疲れもふき飛んでしまう。

散歩に出ると何という名の菊だろ。沼のほとりに咲き誇っている。紫色は野紺菊、白いのには袖香菊(ゆうが)から。枯れ木のとつぺんに黒い鳥が止まっている。芭蕉の句を思い出す。

枯木に鴉のとまりけり秋の暮  
この秋は何で年寄る雲に鳥

# 尾道・千光寺の多田氏と

## 袖ヶ浦の多田氏

志<sup>し</sup>村<sup>むら</sup>有<sup>くに</sup>弘<sup>ひろ</sup>

(相模女子大学名誉教授)



尾道は風光明媚な町だ。とりわけ千光寺（真言宗）は、雄大さと繊細さが見事に調和しており、参拝者の心を慰める。寺の開基は大同年元（八〇六）、中興は多田（源）満仲の宿願で造立したといわれ、本堂の本尊である千手千眼観世音菩薩は聖徳太子の作。赤堂と呼ばれる朱塗りの本堂、除夜の鐘で有名な驚音楼は尾道の象徴。俚謡に「音に名高い千光寺の鐘は一里聞こえて二里ひびく」とある。奇岩も人を驚かす。本堂の千手観世音菩薩は俗に火伏せの観音といわれ、大師堂の

弘法大師像はもと高野山に安置されていたが、この地の篤信者の夢にお告げがあり、千光寺に安置されることになったもの。そういえば、高野山にある多田満仲の五輪塔の墓を嬉しく拝しただことがある。

多くの文人墨客が千光寺を訪れ、歌人西行は「大宝山や玉の浦わのたぐひなみよるよる月の影をしぞ思ふ」と歌い、林美美子は『放浪記』に「赤い千光院の塔が見える」、志賀直哉は『暗夜行路』に「六時になると上の千光寺で刻の鐘をつく」と記している。詩歌

句碑も多く、松尾芭蕉・十返舎一九・物外・頼山陽・正岡子規・志賀直哉・吉井勇・柳原白蓮らの碑がある。物外（拳骨和尚。伊予生まれ。尾道済法寺住職）の句「あれは伊豫こちらは備後春の風」は爽やかで軽妙。NHK朝の連続テレビ小説「花子とアン」で再び国民的スターとなった柳原白蓮の「ち、母の声かときこゆ瀬戸海にみ寺の鐘のなりひびくとき」という千光寺の鐘を詠んだ歌碑も見える。

ところで、多田満仲の子の頼光は大江山の酒吞童子を退治した人といわれ、それから五代目の頼政は鶴（鶴）を退治した武将として知られている。『平家物語』によれば、近衛天皇の時代、夜な夜な、東三条の森の方から黒雲が流れてきて、御所の上をおおうと、帝はおびえて気を失うという事件が起こった。それを源頼政が矢を射て退治したのだが、それは顔が猿、胴体が狸、手足が虎、尻尾が蛇という妖怪で、『平家物語』は「鳴く声鶴にぞ似たりける」と伝えている。『平家物語』

は、二条院の時代にも「鵠といふ化鳥」が鳴いて宸襟を悩ませた事件を伝えている。このときも頼政が退治したという。厳密に言えば、最初の事件で仕留めた奇怪なモノは鳴く声が鵠に似ていたということで、鵠だとは書いていない。二条院の時代の事件は、判然と「鵠といふ化鳥」と記している。ともあれ、天皇を悩ませる奇怪な事件を頼政が終わらせたということだ。

退治された鵠であるが、『平家物語』は「かの変化もの」を丸木舟に乗せて川に流したと記している。その「変化もの」(鵠)であるが、今、大阪の都島に「鵠塚」なる立派な祠があり、また、芦屋市の芦屋公園の中に「ぬえ塚」と刻された石がある。頼政が以仁王の乱で平家と戦い、宇治の平等院で戦士したのは、治承四年(一一八〇)五月二十六日のこと。

話が変わるが、二〇一五年九月、私は千葉県の袖ヶ浦郷土博物館に「源頼政の鵠退治」という話をしに出かけた。同館では「山の怪・海の怪」と

題する企画展を行い、私の話はそれに合わせたもの。展示の中に「兵庫どんのむじな」というコーナーがあり、鵠の祠と称する石を重ねた形の写真が展示されていた。「兵庫どんのむじな」は、多田兵庫どんは京の御所で鵠を退治した源頼政の子孫といわれ、その屋敷に「むじなさま」と呼ばれる石のお宮が祀られていたという。今から五百年くらい前、毎年正月になると馬に乗った武者が現われ、無言で帰って行くようになった。ある年、武者が帰ったあと、犬がほえるので不思議に思つて外へ出ると、大きなむじなが死んでいた。その後、武者は現われなくなり、兵庫どんの家のくらしが厳しくなってきた。神主に拜んでもらうと、鵠の祟りであるから、祀るようにと言われた。そこで、石のお宮を建てて「むじなさま」を祀ったところ家運があがったという。石のお宮は壊れてしまったけど、今も木のためとて祀っていると。

博物館での鵠退治の話を終えたあ

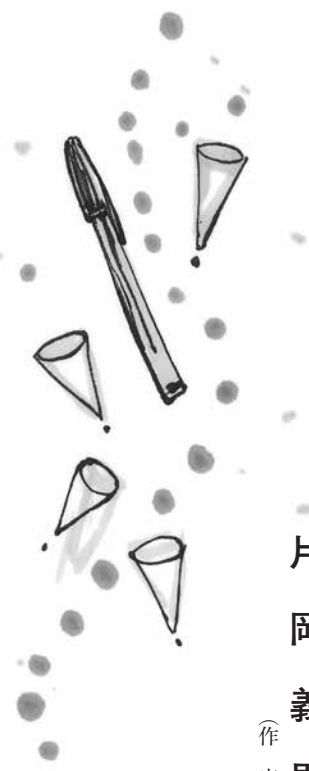
と、学芸員の稲葉理恵さんに案内され、鵠の祠を拝することができた。稲葉さんは多田邸に向かう道が兵庫坂と命名されていることを教えてくれた。多田の当主は多田兵庫さんといい、代々、「兵庫」を名乗るのだという。頼政が兵庫頭(父の仲政も兵庫頭)であったことに由来するであろうか。兵庫さんは「治承に頼政が滅びたとき、自分の先祖は千葉に来た」ということを語ってくれた。

尾道の千光寺の住職は多田満仲が中興開基であることと関連があるのだろうが、多田氏を名乗る。袖ヶ浦に住む頼政の子孫も多田氏。私は先年、尾道の千光寺を訪れたおりに多田義信氏と知り合い、その後、親しくしていた。私は二人の多田氏と知り合うことができたのだが、ふたりとも凛とした風貌と心優しいところが共通する。尾道の多田義信氏と千葉の多田兵庫氏とが親しく語り合う日がくればよいが、と密かに願っている。



# 僕はかつてボールペンだった

片岡 義男  
(作家)



ボールペンというものを僕が初めて手にしたのは、八歳あるいは九歳くらいの頃ではなかったか。ボールペンの構造は、そのときすでに知っていた。あるいは、そのとき教えられて、すぐに理解した。

軸の先端に金属製の小さな三角錐があり、その三角錐の突端に、ごく小さな金属製の球体が一個、はずれて落ちないような精密な加工で保持され、軸

のなかにはインクの満ちた芯があり、紙の上で書くとき金属の球体は保持機構のなかで回転し、その回転によって、芯のなかにある粘性の高いインクを、小さな球体のぜんたいがからめ取っては、紙の上に移していく、という一連のメカニズムが円滑に作用すると、そこにめでたく、一本のボールペンというものが、筆記具として成立する。

精密度や材料の質は、僕が子供だっ

た頃にくらべると、現在のボールペンは飛躍的に向上している。しかし、いま僕が書いたような基本的な構造は、なんら変化していない。

軸の先端にある三角錐のなから、その小さな一つの球体を取りはずしてみよう、と思った僕は、十歳にはなっていたと思う。日本製のボールペンが、ごく普通の人たちの日常生活のなかに、あつて当然のものとして、出まわり始めた頃だ。その頃の僕は東京から疎開した山口県の岩国にいた。戦後の日本で多様な文房具が最初に数多く普及したのは、山陽そして中国地方だったという。

道具は一丁のペンチしかなかった。だからそのペンチで三角錐をくわえ、子供の僕は力を込めた。ペンチで三角錐を割ればいいだけではないか、と僕は思った。三角錐はなかなか割れなかった。子供の力は弱かったのか。金属製の三角錐をくわえたペンチの先を金槌で叩いたら、何度目かに三角錐は割れた。

割れた三角錐の先端から、ボールペンのボールを一個、僕は指先につかまえた。指先はインクまみれとなり、このインクはなかなか落ちなかったが、ボールペンの先端には、金属の小さなボールが一個、確かにあった。そのボールの直径は〇・五ミリではなかったか。指先に持つ、という表現は当てはまらないほどに、その光る球体は小さかった。なんと言えはいいのか。指先にとまらせる、とも言えはあのとさきのあの感触の、十分の一くらいは伝わるだろうか。黒に近い色の、粘性はあるけれどさほど粘っているわけではないインクで覆われた指先で、その小さな球体は輝いていた。きれいに磨いたような輝きのある、真球にかぎりなく近い状態の出来ばえでなければ、三角錐の先端に保持されて落ちることなく回転を続ける、という芸当は出来っこないのだ。

粘性のあるインクに覆われた指先で輝く、小さくて精密な金属の球体を見ながら、以上のようなボールペン理解

が十歳の僕の核心を貫いた瞬間、僕はボールペンになっていた。

自分がボールペンになった瞬間を、それから二十五年後にもう一度、僕は体験した。僕は三十代後半の年齢で、場所はアメリカだった。当時のアメリカで、食事をしたり買い物をしたりすると、店の人は手書きのレシートを手渡してくれた。都会でも田舎でも、レシートは手書きだった。手書きするときに店の人たちが使っていたのは、スティック・ペンと呼ばれていた鉛筆に似たスタイルのボールペンだった。

手書きのレシートを受け取るたびに、書き慣れているがゆえにおおまかな、筆圧を充分にかけた、太い線のボールペンの字に、僕は感銘を受けていた。感銘がいくつも積み重なると、閃く瞬間がやって来る。自分もおなじようなボールペンを使って、こんな字をいつも書くようになりたい、という閃きだ。

ボールペンはいくらでも手に入った。レシートに近い紙質のノートブック

クをスーパーマーケットの文具売り場で買い、食事のつれづれにその日の雑感を、ボールペンでやぞんざいに、大きな字で、筆圧をかけて、書いてみた。

ノートブックのページに書かれた自分の字を見ながら、書いていくときの感触のすべてが感覚のなかによみがえった瞬間、僕はボールペンになった。ただ単に一本のボールペンではなく、何枚もページの重なったノートブックやボールペンのインク、そのときその場の空気や匂い、音など、感覚で受けとめるすべてのものがひとつになって注ぎ込まれた結果としての、ボールペンだ。

自分がボールペンになった三度目は、まだ体験していない。まだ体験していないのだから、すでに体験した過去の話ではなく、いつもわからない未来の話としての、三度目があるかないか。なくてもいいのだが、あるとすればそれは、どんなかたちと内容をともなったものとなるのか。





爽やかなさえずりが聞こえてきそうな  
“幸せの奮いとりさん”

瀬戸内海の静かな波に

幾度も幾度も洗われた硝子のかげらのように

まろやかに蒼くほほ笑む作品たち

暮れなずむ讃岐のたそがれのように

炎の余韻を鎮めて

物語の始まりを予感させる作品たち

## 讃岐の美技列伝

# さぬき庵治石硝子

Aji Glass

世界の銘石と称賛される「庵治石」。

その石から生まれた「さぬき庵治石硝子」(Aji Glass)  
が今、注目を集めている。

一般に知られている「庵治石」には、

高級な墓石というイメージもあり、

きめ細やかなモノトーンが魅力。

しかし、その石を溶かして生まれた硝

子は瀬戸内海を思わせる蒼色に染まる。





## ふるさと香川への 思いが導く

「さぬき庵治石硝子」、その繊細で美しい作品を生み出しているのは、香川県生まれの杉山利恵さん。幼少期よりガラス瓶やビー玉が宝物であったという杉山さんは、インテリア企業や画廊、広告業界で働いていたが、地元のガラス作家の作品に出会ったのをきっかけに、ガラス工芸を志すようになった。

地元の工房で吹きガラスの講座を受講した後、東京、富山と修行に3年間を費やし、その間に香川県への愛郷心に気づいたという。





一般的にガラスは、石や砂から取り出したケイシャやソーダー灰、石灰石などを混ぜ合わせて作られている。その材料を高温の炉の中で溶かし水飴状のガラスにする。それを吹き竿というパイプの先に巻きとり、吹いたり、道具で形を変えたりと数々の工程を経て作品になる。一晩かけてゆっくり冷まして完成する。



初めてガラス工房を訪れた瞬間「これだ。私のしたいこと、私の居たい場所」と無条件に感じたという杉山さん。

そして、香川県でしか創れないガラスの作品を生み出したいと思うようになった。やがて捨てられている庵治石のくずや粉があることを知り、それを作品創りに生かすことを思いつく。







# Aji Glassの世界が広がる RGGギャラリー

「さぬき庵治硝子」を誕生させた杉山さんは、2013年に高松市内に工房「Rie Glass Garden」を設立。翌年にはその2階に「RGGギャラリー」をオープンさせた。ギャラリーには、「Aji Glass」をはじめ瀬戸内ブルーに染まる美しい作品がメロデーを奏でるように

並べられて  
いる。

器の他にもランプシェードやキャンドルホルダーなどもあり、暮らしをやさしく彩るさまざまなお品が語りかけてくる。

繊細でありながら、存在感のある「さぬき庵治硝子」。杉山利恵さんならではのふるさと愛の結晶である。



グラスや花入れなどの作品は、HPからも購入することができます。  
HP:<http://aji-glass.jp>



白いガラス戸が見える倉庫の1階は工房。  
2階はギャラリー。制作風景も見学可能。



Gallery&Shopの営業:土日月(月祝もOPEN) 15:00~19:00

# 宗教の問題も倫理の問題も

志村栄至(栄守改め)  
(評論家)

地方局のテレビ番組を横目で見ていたら、「家族という地獄」と発言した人がいたので確認すると、女性コメンテーターだった。

そんな風に吐き捨ててみたいシーンは、人生には確かにある。しかし、それこそが工夫のチャンスと捉えることもできる。

小林秀雄の『カラマアゾフの兄弟』(『小説と同名の評論』)には、主人公・ドミトリイ(『通称はミイチャ』)の告白の引用が、詠む者の下肝を抜くところがある。

「自分でもわからない、もしかしたら殺さないかも知れないし、或は、殺すかも知れぬ。(中略)俺は、あの喉団子や、あの鼻や、あの目、あの厚かましい皮肉が憎らしくて堪らない。あ

の男(『実は父親のこと)の人物が厭で堪らないのだ。俺はこれを怖れてゐる。」

この作品を発表して三年後に、ドストエフスキイは亡くなっているから、先人も人生の最終コーナーに差し掛り、家族とか出自、さらには幼児体験というところへ関心が移行したのだろうが等々、好奇心は騒ぐ。

その問題の父親だが、小林の著作から略記すると、軍医を退役後、農地を小作人に貸し与える地主であったらしい。何よりもその劇的な最期が、生前の人物像を彷彿とさせて余りある。

「或る日、農民の恨みを買ひ、領地を訪れる途中、馬車の中で惨殺された」とあるところに、それがいみじくも窺える。

また、息子であるドストエフスキイ自身も、オムスク市の獄舎で、四年間の労役に耐えたという異色の経歴を持つことは知られる。若い情熱の赴くまま教宣活動に走ったという行為が、ニコラス治世という時代、そういう仕儀となったようだ。

その間の苦悶が誘因となったと想像されるが、善意を実行に移したその結果が、なぜ、地獄の苦しみを味わうことなのか、この深い疑念が、その後、どういうところまで到達したか。小林のドストエフスキイ関連の著作がまさに、その解答と言える。『ドストエフスキイの生活』では、先人の心の内側を、こう表現している。

「無気味さが残る。経験から選択せず、ただ深くこれに傷つく事が出来た人の無気味さが。運命から割引きする事を知らず、ただこれに愛着する事が出来た人の無気味さが。」

言うなればこれは人生肯定の真摯な精神そのものだ。少し視野を広げれば、真面目な信仰心を所有する人の生

きる姿勢とも言える。ところが、小林の独自性、肝心要は、その少し先にあるところで、その存在感が光る。

ところで、世の中には不思議の宝庫でもあるらしい。小林においても、これと言えるところがなんとも妙な気持ちにさせる。それは、大作とか大労作では、おいそれとは書けないことが、片言集である、『断想』のような小品に、無雑作に顔を覗かせているからで、皮肉の極みをここに見る気がしてならない。

「ドストエフスキイ」は『罪と罰』で、所謂宗教の問題も倫理の問題も扱ってやしない。罪といふ言葉、罰といふ言葉を発明せざるを得なかつた、個人と社会との奇怪な腐れ縁を解剖してみせてくれたのだ。」

「宗教」も「倫理」も、と書いているところを訝る人はいると思われる。しかし、腹の底から納得する日は来る。こんな例を考えてみたい。真剣に日々を生きているのに、自分の人生には発展とか向上の気配がまったくな

い。フランスの先人のパラドックス、「生き続ける過去」に鑑み、いろいろ思い起こしてみるが、心当りがないと。

あの小林も、「上手に思い出す事は非常に難かしい」（『無常といふ事』）と書いているわけで、それは大きな試金石を前にすることであることは確かだ。「上手に」とあるが、まず、一体、何を「思い出す」べきなのか。「宗教」とも「倫理」とも違う何かとは、との自問が虚しく反響する日は続く。

ところがどっこい、そんな私達を予め見越してか、賢者はちゃんと解答を用意していた。

「ドストエフスキイは、矛盾を解決しようと工夫したのではない。解決を工夫するくらゐなら、矛盾に殺された方がましだと思つたのだ。」（『断想』）

「個人と社会の腐れ縁」とか、ここで使う殺伐とした言葉、故意にこんな書き方をする時の人間心理が、このように読めないか。不転の重大事であるからこそ、逆にそんな表現を使つて

みたかつたのだと。

つまり、日露の先人の大命題、「個人と社会」という対比で、どちらに比重があるかということ、これを確認することこそ、私達に求められていると読めて来る。私達は、己れの過去に、これに抵触するシーンがなかつたかどうか、これを「思ひ出す」ことを第一義とすべきではないのか、と。

さらに、最大の試練は、「一つの持続体としてこの世を理解したベルクソン」という言葉だ。しかし、人生の難問に追い込まれて、感性が限界まで緊張すると、日仏の両賢人がどんなイメージをあの言葉にしたか、ささやながら接近できる気がする。

自分の過去の失態が負うべき苦痛を、他者が代替していると見えて、心苦しい安堵感と感謝の念を味わう時は、人生にはあるものだ。

小林が、「宗教の問題も倫理の問題も扱ってやしない」と書くところを、穴のあくほど見つめてみるのも一方途のようだ。



## ベルリンの壁のメッセージ

今年も六月にまずはウイーンへ行ってから、ベルリンを訪れた。私が滞在したホテルから十五分くらいのところに、統一のシンボルであるブランデンブルグ門があっ



た。ギリシャ風の風格のある門だ。分裂時代には東ドイツ側にあり、門前に壁があった。今は自由に通り抜け出来、観光客でいっぱいだ。分断時代を知らない我々には平和な門に思えるのだ。

門を通り抜け、リンデンの並木道を通ってポツダム広場にてた。三つの高層建築が建つ、その一つがソニータワーだ。広場は一見殺風景に見えた。私は高層ビル群を想像していた。後日わかったことだが、三つの建物は門を表しているということだ。ドイツは高層ビルの集合体を意識的に避けているという。都市計画が出来ていることは素晴らしいことだ。

ベルリンの壁が残されているエリアにてた。壁は何ヶ所か残されている。当時のままの壁、イーストサイドギヤラリーの壁、更に百メートルくらいドイツレジスタンスの記念碑の写真展が開催されている壁、それはナチズムの歴史を綴ったものだ。観覧者はほとんど外国人だった。この展示から過去の歴史の上に現在があること、そして未来へのメッセージであろうと思った。

さかもと ふ さ

(型絵染版画家、エディター)  
イラストレーター

# 丙申元旦

山西 靖彦



今年の干支は丙申（ひのえ さる）なので、今年も年賀状には「猿」にちなんだ五言絶句を作って送ることにした。

「さる」を表す漢字には、「猿」のほかにも「猴、狙、狢、獠、獠、獠」など多くある。

「猿」は我が国においても、「猿真似」とか「猿知恵」といってあまりいいイメージがないが中国においても同様で猿にかかわる故事等としては、次のようなものがある。

「猿猴、井に入つて月を取る」（猿が井戸の中に映つた月を取ろうとして、溺れたことから、身の程をわきまえない喩え）

「猿狙を取りて衣するに周公の服を以てす」（周公は、周王朝の基礎を築いた人で、孔子が理想とした聖人。猿に周公の服を着せることから、ものごとが適合していないことをいう。）

ところで猿は「鶏」「犬」「杜鵑（ほ

蟻封潰堰堤

猿穴壞山丘

時養浩然氣

期無後顧憂

蟻封 堰堤を潰し

猿穴 山丘を壞す

時に浩然の氣を養ひて

後顧の憂い無きを期すべし

とときす」とともに漢詩にはよく登場する動物である。漢詩に登場する動物、植物は、長い漢詩の流れの中で特定のイメージを負うようになるが、猿は、その鳴き声がつんぎくように鋭いことから詩の中では悲しい動物としてイメージづけられている。「猿声」「猿鳴」「猿啼」「猿嘯」などの猿の鳴き声をあらわす詩語は、いずれも悲痛なイメージで用いられることが多い。

猿にかかわる物語としては「断腸」がある。「猿の子を促えて三峽を行く船を母猿が哀号しながら追って来る。岸に沿って百里余りついてきたが、遂に船に飛び上って即死する。母猿の腹を破り見ると、腸が皆、寸寸に断たれていた。」という。世説新語にある悲しい話から出た言葉である。

さて、「丙申元旦」の詩であるが、起句と承句とは、孔融の「臨終詩」の一節

「言多ければ事をして敗れ令め、器は漏れて密ならざるに苦しむ。河は蟻孔の端に潰え、山は猿穴に由って壊さ

る。」を踏まえたものである。孔融は孔子の二十世あるいは二十四世の子孫といわれ、三国志の主役の一人である魏の曹操を諷めて処刑された人物である。「蟻封」は、「ありづか」のことである。なお、「蟻の穴から堤も壊れる。」という諺は、古く、「韓非子・喻老」の中に「千丈の堤も蠅蟻の穴を以て潰る。」の語がある。また、「蠅蟻」とは、「けら」と「あり」のこと。「とるに足らないもの、あるいはつまらないもの」のたとえでこれらの巢穴から堤が潰えることから、些細なことでもおろそかにすれば大事に至ることもあるという諷刺である。

転句は、「猛子・公孫丑上」の「吾、善く吾が浩然の気を養わん」をそのまま借用した。孟子のいう「浩然の気」とは、「天地の間に充滿している至大至剛の気のこと、これが人間に宿ると何物にも屈しない道德的な勇氣となる。」という。これ程のものは求むべくもないが、せめて時々山里の静かな温泉にでも入って、きれいな

空気を胸いっぱい吸って、ゆったりと心を開放し天と地に同化した気分を楽しみたいと思う。

「後顧の憂い」とは、「後に気づかないを残すこと。後日の心配」のことで、年齢も七十歳を超えた私としては、子供たちからは「終活」をしきりに求められておることから、そろそろ後々の心配がないように身近の整理に取り掛かるとともに、これからの人生において晩節を汚すことのないように注意を怠らずに生きていきたいと考えている。なお、今年の詩も起句と承句、転句と結句はともに対句になっており、全対格の詩である。

